

最先端画像から正しい情報を読影

城山病院放射線科画像診断センター
副部長 三田裕記医師

画像診断は日進月歩の進歩をとげており、現代医療に欠かせません。最新のCT(コンピュータ断層撮影法)やMRI(磁気共鳴画像)機器は1回の撮影で約1,000枚以上の画像がコンピュータで作成されるものもあります。これらの膨大な最先端画像を熟知し、素早く必要な情報を読み解いて正しい治療を導き出すのが画像診断専門医です。しかし、その人数は全国的にも少ない中、城山病院で常勤医として2名を有します。院内だけでなく、地域の開業医の先生、他院からの検査・読影の依頼を多数受け付ける三田医師に話を聞きました。



日本医学放射線学会診断専門医

画像診断専門医として

みなさん、放射線科の医師はどんなことをしていると思われるでしょうか?レントゲンを撮っている人?ではありません。レントゲンを撮影しているのは放射線技師です。我々医師は技師に適切な画像が撮影できるように指示を出しています。ご存じのように、CTは放射線を身体に当てて臓器の内部を画像化する検査のため、できるだけ被ばく量を少なくするように検査を計画しなければなりません。そして、重要なのが撮れた画像から必要な情報を読み解くことです。これを読影と言います。具体的には、患者さんの主治医から出された指示に従って適正な検査(CT、MRI、一般撮影、PET、CT、血管造影検査など)を行い、検査画像から画像診断を所見レポートにまとめ、主治医に返します。前述の通り、最先端検査機器は膨大な画像が作成され、頭の手先から足先まで全身を読影しなければならぬ

ことでもあります。この中から主治医が欲しい情報を得るのは困難なことがあり、特に専門分野以外についてはなおさらのことです。私たち専門医は、臓器別の専門を越えた医学知識と経験から重要な情報を見落とさず、正しい治療に役立つように陰ながらサポートしているのです。「ドクターズドクター」とも呼ばれています。当科では月に約1500件の読影を行っており、その中には地域の開業医さんからの検査・読影依頼が約160件ほど含まれています。そして検査終了当日あるいは遅くとも翌日まで迅速なレポート返送を心がけています。読影の正確さとスピード、そして主治医とのコミュニケーションが大切な診療科です。

カテーテル治療医として

私たちは画像診断の知識を生かし、血管内治療(カテーテル治療)も行っています。主に鼠径部(太ももの付け根)からカテーテルと言う細い管を血管内に挿入して、疾患のある部分の血管の閉塞(塞栓術)を行います。もちろん、カテーテル治療は心臓血管センターや脳・脊髄神経センターでも行われていますが、当科では主に肝臓がんや胃静脈瘤の治療、消化管や外傷による出血を止める治療を行っています。カテーテル治療は患者さんの体への負担が少なく、早ければ手術の翌日から普通に食事まで、入院期間も長くありません。

早期発見に一役を担う

私たち画像診断医は外来診察をあまり行っておらず、直接患者さんと接する機会は少なく、いわば放射線科はマイナー科です。しかし、診療の縁の下力持ちとして、最先端の画像情報と画像診断を提供することで主治医の先生方をサポートし、ひいては病気の早期発見、適切な診断治療など質の高い医療の一役を担っております。一度、みなさんが受診される病院でも画像診断専門医が関わっているか、病院のホームページ等でご確認ください。